



Title	古今飛白書に関する一考察：用筆を中心に
Author(s)	全, 容範
Citation	デザイン理論. 2006, 49, p. 80-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古今飛白書に関する一考察

—用筆を中心に—

全容範

今日の五体書は、長い歴史のうえで造形性が試されて帰結された漢字の形で、ほかにも「雑体書」という、約一六〇種の実態が伝えられている。飛白書は雑体書の一種で、後漢代につくられ、古の韓国、日本に伝えられ、今の中華人民共和国、韓国で書かれている。本論は古今の飛白書の関連記事と図版とのもとで検討を加え、飛白用筆の造形性を考察したものである。

飛白書は蔡邕¹⁾がつくった、とされる。「役人が聖帝をもって、鴻都門で文字をつくるのを見、飛白書をつくった²⁾」という。蔡邕は聖帝が「飛び」、下地に「白れ」ができたところで、飛白書を悟ったのである。「白れ」が書造形に現れたのは、戦国代以後の竹簡、木簡に見られる隸書の波磔で、「細長い竹や木に文字を書く際、これらの理に抵抗する感覚が筆を浮沈させ、やがて人為的波磔ができた³⁾」という。横画を例とすれば、起筆部で「筆峰を現れないように逆入し」(蚕頭)、送筆部で「うろこのような律動の調子をつけ」、收筆部で「下地に抵抗しつつ、右上へ跳ねて波磔をつくる」(燕尾)ことである。すなわち派勢が波磔をつくり、しだいに飛白用筆を築いていった、と思われる。ここにおいて筆は重要である。「蔡邕は聖帝ではなく、木筆を用いた」とあり、そもそも飛白筆があったことが窺われる。蔡邕の遺意をとった飛白筆があり、「小さい篆筆の筆頭が三、四個並んだ、櫛のようなものを一つの筆管のなかに納めた」という⁴⁾。李朝では「柳の枝を削って端を潰し、墨に浸して文字を写した⁵⁾」といふ。

古の飛白用筆の考察において、私は清代の『飛白錄⁶⁾』から、後漢の張芝の「一筆飛白書」、六朝期の衛恒の「散隸書」、王羲之の「龍爪書」、蕭子雲の「小篆飛白書」(王献之と蕭子雲との飛白書)、唐の太宗の「晋祠銘」、高宗の「大唐紀功頌碑」、武后的「昇仙太子碑」を挙げ、平安期の空海の「十如是」、李朝の「孝悌圖」を加えた。この資料を纏めると、飛白用筆は草書によって拡張されていて、そういう意味で「一筆飛白書」は草書の高い造形性をもつものである。六朝期では「飛び」と「白れ」との具合がさまざま、どちらかに偏重した用筆が窺われる。蕭子雲、王羲之は「飛び」を、衛恒、王献之は「白れ」を重んじた。唐王室の飛白書は複数の書体の趣を用い、隸書の応用が飛白用筆へ繋がった。太宗の飛白書は他書体との混用用筆だが、高宗と武后との飛白書の、起筆部の逆入は隸書と同様で、送筆部の抑揚を重ねた「白れ」と收筆部の「燕尾」とは、隸書の波勢、波磔を詳細にし、様式化が進んだ。空海は連線の書体の趣を一筆のなかで活かし、抑揚を重ねることに変化を与え、多様な用筆を駆使した。とくに「龍爪書」と「孝悌圖」とでは、書体や事象を明らかに表すために、一定の用筆の仕方が守られた。なお飛白用筆は図柄的性向のもので、高宗の飛白書では「鳥の飛び」を表した用筆が認められる。武后的図柄の用筆は飛白筆の一部分を活かした事実的表現で、空海の図柄は飛白筆の物理的な性質による変容的表現だ。「龍爪書」と「孝悌圖」とは「飛び」と「捻り」との筆跡を図柄の単位として組み立てた。

今、飛白書はからうじて継がれ、「板書」、「革筆」という名で、観光地で書かれている。今の飛白筆の多くは羊の毛などを圧縮したフェルトなどで挟み、檜目と無檜目とがある。色採りは顔料の赤、黄、緑、青色を、下地は和紙、ナイロン、模造紙などを用いる。今の飛白用筆の考察において挙げた飛白書は、朴ニヨジュウ（ソウル）の「全容範」、申新紙鉉（ソウル）の「家」、李ジョンクック（イジョンブ）の「全」、郭長富（山東省）の「容」、孔凡進（山東省）の「松」、「竹」、「風」、無名氏（河南省）の「鳳」である。この資料を纏めると、今の飛白書は、隸書の派勢、波磔が乏しく、下地から飛白筆を離れないようにして、意図的に「疾り」、「白れ」をつくるなど、古の飛白用筆を似せた用筆が窺われる。今の飛白用筆は二つに分けることができる。無檜目の筆で「疾るか、白れること」と、檜目の筆で「引き張ること」とである。これは発色を伴い、書体や図柄のなりゆきに沿って運筆しつつ、ありのまま折筆し、おりに触れてぎざぎざしたり、押したりする。今の飛白用筆は図柄的性向が著しく、図柄がすべての字画に代える場合もある。遠近法を用い、とりわけ古来画法からなるものがある。「没骨法」のように事物全体の印象を、「平頭点」のように事物の詳細を表し、山水画の実景らしく仕組む構成力、花鳥画の詩情を表す描写力を継いでいる。以上のこととは多少の違いはあるが、今の飛白書全般に現れる。

古今の飛白用筆は相通しており、大本は蔡邕が鴻都門で悟った用筆である。これは後漢の隸書から生まれて、草書に育てられたが、飛白独自の書法がなく、書の歴史のうえで造形性が試された。六朝期では飛白用筆について分析的眼目をもち、書家の得意の書体に基づいて、「飛び」と「白れ」との、どちらかを重んじた。これは今の飛白書の、無檜目の

筆の「白れ」が少なく、檜目の筆の「白れ」が多いことと関連して考えることができる。唐代では飛白用筆が分化していた。すなわち楷書の三折法に影響され、字画の各部分で隸書の応用が詳しくなった。これは古今の飛白書に共通するものである。とくに工芸的用筆は古今の飛白書に多く現れる。古の飛白書には、熟練の技によって一定の用筆造形性を保つ工芸的性質がある。これは今の飛白筆で様式化され、檜目の有、無の物理的性質に基づいて表されている。図柄には飛白用筆が微細化された。飛白筆の一部分、またはその物理的性質を活かして事実的、変容的図柄を表し、図柄の単位を見出した。これは今の飛白書にも現れていて、古来画法の導入は飛白用筆の表現の可能性を高めた。

本論における飛白用筆の考察によると、今の飛白書は古今の用筆を兼ね備えた、工芸性の強いものである。古今の飛白用筆を繋ぐ造形性をもつものとして、空海の飛白書が挙げられ、これより立体用筆の概念が生じる。運筆の時間の横軸と、抑揚の空間の縦軸との変化が、さまざまな飛白書をつくる。円、方を書き、ある方向へ文字が下地から離れていく、質感と量感とが表される。飛白用筆がつくる立体結構は有望なものである。

- 1 字は伯階。官は左中郎。学識が広く音楽、絵画に優れた。天文の知識、占術に明らかで、篆書、隸書をよくした。『後漢書』蔡邕列伝第五〇下)
- 2 張懷瓘『書斷』上、「飛白」項。
- 3 石川九楊『中国書史』京都大学学術出版会、二〇〇〇年、七二頁要約。
- 4 黄伯思『東觀餘論』・細井知慎『思胎齋管城二譜』〔駒井鶯静「雜體書論」二二九頁参照、『空海の書論と作品』雄山閣出版、一九八四年〕
- 5 柳得恭『京都雑誌』「飛白」項。
- 6 陸紹曾、張燕昌編著。一八〇四年頃、飛白論叢書。